

大判が怖い話・松江市八束町二子

令和3年8月31日

収録・解説・酒井 董美^{たによし} イラスト・福本 隆男語り手 足立チカさん（明治27年生まれ）
収録・昭和44年7月26日

あらすじ

とんとん昔があつたげな。役者が巡業に出ていましたが、母が病氣になつたりしたので、途中で帰らなければならなくなりました。晩になつて、七類（美保関町）のころを歩いてると蛇が出てきて、

「飲んでしまふ」と言う。

「今夜は許してくれ、明日の晩には必ず飲まれてあげる。母に一目逢つてから飲んでくれ。母が恋しくて帰るところだから」

「ほんなら、約束を違えずに明日の晩に來い」

「おまえの好きなものを土産に持つてこようと思うが、それは何だかい」

「兎でも鶏でも何でもいい。生ものがいい」

「ほんなら、一番嫌いなものは何だかい」

「煙草の脂が一番怖い。この池に脂が入ったら、わしは生きてはおられぬけん」

「ああ、分かつた。そんなら肉

でも鶏でも持つてくるけん。こう言うのと、今度は蛇が役者に聞きました。

「おまえは何が嫌いだか」「大判や小判が一番嫌いだ。これ見たら、もう寿命がなくなる」

「ああ、そげか」

「それでは明日の晩は必ず來るけん」

それから役者が帰つて、母に逢いました。そして約束通り行かぬと大蛇がどのようなことをするやら分からぬからと、煙草の脂を壺にいっぱいためて出かけました。

「蛇殿、蛇殿、約束通り來たけん」と言つて、その壺を沈めたら、蛇は狂い回つて人を飲むどころではありませんので、役者はそのまま帰つてきました。そしてその明くる晩、蛇がやつて來て、

「夕べはえらい目にあわせられたが、かたきを取りに來た。一番怖いものを持つてきちやつたけん」と大判をザザーツと投げ込んで、

「今度はこれが小判だぞ。一番怖いもんだらあが」と言つて、座敷いっぱいにそれらを投げ込んで帰つて行つたという事です。

解説

何と言っても人間と畜生のことですから、人間が一枚上手だったのです。

この話は「何が怖い」、あるいは「田之久」として分類されている昔話であり、笑話に属する。「何が怖い」の方の主人公は特に役者とは決まっていないが、「田之久」の方は役者である場合が多い。そしてどちらの話も人間が知恵を働かして動物をやりこめて、大金持ちになるといふ人々の願望をそのまま話にしたような内容である。県下でも同類は各地で語られている。

浜田市三隅町門殿で聞いた「何が怖い」系統の話では、蛇の代わりに狐が愚かな動物として登場し、役者の代わりに爺が出てくる。また、狐の怖いものは犬であり、爺のそれは白金ということになっている。結末は狐が白金を爺の部屋へ投げ込んで去り、爺は大金持ちになるといふのであつた。

（元島根大学法文学部教授）

